

## 特集「コミュニケーションの基礎・基本」

# コミュニケーションの基礎・基本 を問い直す

森住 衛

(大阪大学教授)

### 1. はじめに どの段階での基礎・基本か

トマス・マンの箴言の一つに「たとえ悪口や罵倒でも沈黙よりましである」というのがある。これを本稿でとりあげる「コミュニケーションで何が基礎・基本か」という点からみると、生徒が「ひきこもり」のような状況下では、とにかく話を交わすことが基礎・基本であるとなる。では、もう一段階進んで、なにがしかの話を交わしたとしよう。そのとき声が小さかったら相手に聞こえない。筆者の勤務校の学生の2分間スピーチを聴いていて最近とみに感じるのであるが、5人に1人の割合で声が小さい。これでは内容がよくても相手に伝わらない。このような状況で基礎・基本は何かとなると、声の大きさである。次に、声の大きさもよしとしよう。この段階で問題になるのは話の内容である。これも次元によって異なるが、意志疎通の究極的目的を考えると、あいさつや道案内も大切であるが、内容に気づきやインパクトがあるかどうかということが最も大切である。メッセージ性があるか、つまり、聴くに値する内容があるか、話すに足る内容があるかということになる。このように、基礎・基本の議論はいろいろな段階や取り上げる角度で変わってくる。中学校で行っている英語教育はすべて基礎・基本である。小論では、2002年から「週3時間」になる状況にあって、このすべて大切なもののうち、何が相対的に欠けているかという視点から、最重要なものは何かを考えてみたい。取り上げる角度は筆者が現在最も気になっている3点である。

### 2. 知識や技能だけでなく観点も重要

一般に「基礎・基本」というと、文型・文法や語彙、発音などの言語材料および場面や機能など言語活動が対象になる。これらは具体的に取り出しやすく、分量も限定されているので、扱いやす

い。しかし、これら知識や技能に加えて、観点の「基礎・基本」もなくてはならない。ことばの観点とは、ことばと人間や社会との関係をどうとらえるか、英語という言葉語をどう考えるか、英語を使う際にどのようなスタンスをとるかなどのことばのとらえ方・見方である。一言で表すと言語観である。これは精神に関することで、その内実は広範囲・多岐に及ぶ。具体的にいうならば、次のような例になる。いずれも上記の知識の「知る」や技能の「使う」に対して、「判断する」に関するもので、この認否によって言語観が分かれる。

- ある国や地域に行ったら、あいさつくらいはその国や地域のことばを使う。
- 国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- 少数・先住民族語は消滅しても仕方がない。
- ことばの学習は役に立たなければ意味がない。
- ことばの教育はスキルの教育である。
- ことばの教育は人間教育に資するものでなければならない。
- 英語が話せるということは「国際人」である。
- 英語は大言語であり、最も便利なのでみんな英語を学ぶのは当然である。
- 日本式英語を堂々と押し進めるべきである。
- Queen's English や General American の発音のみが正当で美しい。
- 在日外国人が人権の問題で公の場に立つようなことがあったら、その人の母語を使えるように保証すべきである。
- 日本も英語を公用語にした方が「国際通用力」が増す。

NEW CROWN では、この言語観に関わる問題を題材や教科書構成、文法の扱いなどに打ち出して

いる。見返しの 世界の「こんにちは」もいろいろな言語に関心をもつという言語観に係る。伝統的な登場人物の配置も然りである。題材では 1 年 7 課の “English and Japanese” は学び合いである。母語を大切にするという点から 2 年 8 課の “Ainu”, 9 課の “The United Kingdom”, 11 課の “Kenya” などを取り上げている。3 年 3 課の “Korea”, Let’s Read 3 の “Language Life of a People” などこの種の言語観を取り上げた教材である。1 年の Kato Ken という日本名の順序もこの言語観に係る。言語の使用が個人や民族の自立性 (Identity) に関わるからである。このように、「判断する」場合にはある立場や観点をとる。ここには価値観が伴って、その善悪、正邪は簡単には決められない。しかし、ここを検証しておかないと、知識や技能は真には生かされない。いや、間違っ使われることもある。英語に堪能で反国際的になるなどはこの典型である。この意味で、観点の「基礎・基本」は他の 2 つの領域以上に重要であるともいえる。

### 3. 今も昔もやはり語彙と文法

英語教育で英語の何を扱うかについて、表面に出ている英語の諸相という角度からみると、音、文字、語彙、文法、表現の 5 つに分けられる。ここでいう文法とは広義であり、文型や語法も入る。表現とは、Good morning. や See you. など特別な言い回しとしての挨拶や熟語としてそのまま覚えるものである。さて、この中で、コミュニケーションの基礎・基本として何が重要かということであるが、この 5 つともすべて大切である。しかし、その中でも特にとると、語彙と文法を挙げたい。

まず、語彙であるが、周知のように新学習指導要領では 900 語になった。これはこの指導要領の理念になっている「ゆとり」を考えれば、そして、2002 年からこれまでの実質「週 3 + 1」から「週 3」に逆戻りという現実をみれば、わからないわけではない。いや、後者の議論を本格的にすれば、現行の 1,000 語の 4 分の 1 を減らさないと、授業時数に比例しない。しかし、もう一方でコミュニケーションの基礎・基本ということで考えると、相手との意志疎通をはかれない場合の最も大きな要因は、その単語を知らなかったからということ

は自明の理である。筆者は中学校で最低 3,000 語は出したいと思っている。そんなに出すと不消化になるという意見もあるが、忘れる単語があつて当然である。しかし、興味があれば、それぞれ個人個人によって異なるが、生徒の脳裏に残るはずである。インプットが少ないとアウトプットも少ないというもの、誰もが知っている事実ではなだろうか。さらに、これは言語観に通じることであるが、語彙の制限は精神の制限につながる恐れもある。教科書の 付録 や自作のプリント教材で、できるだけ多くの語彙を生徒の前にさらしていただきたい。

次に文法であるが、発話を多少とも意味あるものにするために、最低限のことばの仕組みを知っておくことはコミュニケーションの原点である。文法や文型をしっかりと理解して駆使できるまでにしておかないと、発話の程度も幼稚なものになる。生徒が文法・文型をしっかりと理解できることを学校の英語教育で保証したい。NEW CROWN が巻末で 文法のまとめ を設けているのはこの所以である。練習問題もコミュニケーションの要素をもたせながら文法・文型の定着をはからねばならない。近年、文法が忌避される状況にあるだけに、あえてその重要性を指摘した次第である。

なお、語彙のうちどんな語彙が基礎・基本かなどのように、この 5 つの諸相のさらに細かい分野の基礎・基本の議論があるが、これに関しては前号の拙稿のうち 言語材料の基礎・基本 を参考にしていきたい。

### 4. 「聞く・話す」に加えて「読む・書く」も...

培うべき技能は 4 つある。この中で何が基礎・基本か。これは難問である。なぜなら全部必要だからである。あえてこの 4 つの中から最も重要なものは何かを取り出してみたいが、その前に、もう一つの技能が基礎・基本であることを述べたい。Listening・Reading・Speaking・Writing の根底にあるのは Thinking である。受信であれ発信であれ、Thinking なしには内容のあるコミュニケーションができない。この意味では Thinking も基礎・基本である。言語活動に Thinking を入れるためには伝達される、あるいは伝達することばにメッセージ性がなければならない。つまり題材がしっかりし

ていなければならない。

さて、4技能に戻るが、新学習指導要領では「聞く・話すなどの実践的コミュニケーション」という言い方を用いて「聞く・話す」活動を重視している。これは日本の英語教育で長い間この2つの技能が軽視されがちであったがための、いわばテコ入れである。確かに最近の国際化により、「聞く・話す」機会が多くなった。また、言語学習は「聞く・話す」から始まるともいえる。その点では、「聞く・話す」が重要であるということは頷ける。問題はバランスである。筆者は現在のバランス、すなわち現行指導要領でいう「外国語を理解し、表現する能力の基礎を培う」という4つのバランスを重要視したい。逆にいえば、「読む・書く」能力をこれ以上落とすとはならない。さらに言えば、「読む」ことは「聞く・話す」活動の基礎・基本になる。きちんと読んでいないから「聞く・話す」ことができないのである。また、「聞く・話す」活動は最近ALTの導入などで向上してきたとはいえ、まだ習熟するためには不十分である。もちろん、場面や機能の点から教科書でもきちんとおさえておく必要があるが、この指導は今の「週3+1」の状況でも本格的に行うことは難しい。「聞く・話す」活動が本格的に基礎・基本になるのは母語習得や第2言語習得のような状況下で効果がある。

「読む」活動は音読と解釈である。音読は最近ではコミュニケーションではないとされ、あまり行われていないが、これがそもそも基礎・基本の欠如につながっている。解釈は、これまで日本語訳を中心に行われてきたが、これは基礎・基本ではない。全体の意味をおぼろげながらでもつかむこと、すなわち大意を読みとること、これが本来の基礎・基本であろう。「書く」活動は句読点や綴りから自由英作文まで多岐にわたっているが、これとて不十分である。特に、自己表現する際の談話構成能力が欠けている。「書く」活動はスピーチをしたり、口頭の報告をする場合に、どのような能弁者でも必ず一度は通過している活動である。「書く」ことによって思考を深め、内容を充実させれば、本来のメッセージ性の高い口頭のやりとりになる。近年のe-mailでも「読む・書く」コミュニケーションが先行している。「聞く・話す」を低く見るつ

もりはないが、その力を強めるためにも、また、日本の英語教育のように「外国語教育としての英語教育」のもとに「学校で週3時間しかもてない」状況で、それも「クラスサイズが30名~40名」という条件を考えれば、つまり、本質的にも実際的にも「読む・書く」が4つの技能の基礎・基本となる。

#### 5. おわりに 困難な状況にこそ本質がわかる

コミュニケーションにおける基礎・基本について、3つの角度から述べてきた。冒頭に述べたいろいろな視点や角度を踏まえると、この他にも様々な議論ができる。最近の学説で言われている「4つのコミュニケーション能力」(Linguistic Competence・Socio-linguistic Competence・Discourse Competence・Strategy Competence)や筆者がしばしば使う「英会話の3要素」(意欲・内容・言語能力)、あるいは「3つの基本活動」(朗読・模写・暗唱)などである。これらについては紙幅の都合で割愛したが、全体を通じて肝心だと思われることは、現実を見て基礎・基本を考えること、そして、基礎・基本は直接的に役に立つことではないことの2つである。前者は、状況や実態を考えないと基礎・基本は上滑りするということである。さらに広げていえば、基礎・基本は学校によって、生徒によって異なる可能性が多分にあるということである。後者は、あまりに近視眼的にものごとをとらえてはならないということである。その点では買い物ができるとか、電話の応対などにのみ集中すると危うい。このような直接的なことは、その場に居合わせると慣れてくる。もっと根元的なものが基礎・基本であるように思われる。

また、今回、すべて重要なものの中からあえて選ぶとどうなるか、というようにせっぱ詰まった状況に我が身をおいてみて改めて感じたのであるが、基礎・基本を考えていくと学校で行われる英語教育の本質は何かより鮮明に出てくる。やや違った次元でいうならば、「週3」という状況を迎える中で余分なものは何かと考えていくと、重要なものが浮かんでくるように感じた。ものごとは困難な状況の中にこそ本質がみえてくる、というのが真実ではなかるうか。